

泉鏡花「高野聖」論——典拠としての『鳥留好語』——

梶 由 美

はじめに

「高野聖」⁽¹⁾（『新小説』明治33・2）研究においては様々な側面からのアプローチが行なわれており、中でも素材論には従来多くの論考がある。そのうち作品成立に関わる重要な素材として諸氏に言及されてきたのが『金驢譚』⁽²⁾（『郵便報知新聞』明治20・1・18〜2・2）と『アラビアン・ナイト』（『全世界一大奇書』明治16年初刊）であり、特に『金驢譚』は「高野聖」の（孤家の婦人^{ひとごゑ}）の系譜に連なる「白鬼女物語」（成立年代に諸説あり、明治二十八〜九年頃の成立か）や「蝙蝠物語」（『新文壇』明治29・3、5、6）の原点に位置するものである。

また、東郷克美氏が「孤家の女は母性と魔性、俗と聖という両義性をもっている」と⁽³⁾とされる通り、「高野聖」の美女が両義的な存在であることも諸氏の指摘するところであり、今や定説化したとらえ方のように思われる。両義性の内実は論者によって多少異なるものの、大きくは東郷氏のいう「母性と魔性、俗と聖」を両極に持つものと考えて問題

はないだろう。⁽⁴⁾

右の『金驢譚』『アラビアン・ナイト』も、特に〈婦人^{せんな}〉の「魔性」の形象に大きく寄与するものであるが、その対極ともいえる女の「母性」に関してはその具体的な典拠は指摘されておらず、従来「観音力」や「玄牝の世界」⁽⁵⁾といったイメージの内に捉えられることが多かったように思われる。もともと「母性」なるものに殊更典拠を求める必要性などないとも言えるが、女の両義性が『八犬伝』の伏姫神女や、謡曲『山姥』や、江戸期草双紙・合巻の絵や、浅野川べりの女芸人の媚態や、幼少時に聞いたフォクロアや、外国種の奇談や、自己の習作『白鬼女物語』まで含めた、多くのイメージ・ことば⁽⁶⁾といった豊かな土壌のもとに形象化したことは事実であっても、それは女の「魔性」の形象に偏ったものである感が否めないのである。これに加えて、〈白痴^{ばか}〉の存在も「夫でありつつ、子の役割も演じている」といったような〈婦人〉との関係性からの位置づけにとどまり、何らかの典拠に基づく造型であるとは考えられなかった。

本論では、これら〈孤家の婦人〉〈白痴〉などの人物像に影響を与え、「高野聖」全体のプロットにも関わる具体的な先行文芸として、米国の作家ブレット・ハート作（内田魯庵訳）の「孤屋」⁽⁷⁾（原題“Mischies”）を取り上げる。本作は魯庵の翻訳短篇集『鳥留好語』⁽⁸⁾（明治26・9 警醒社）に収録されており、以下「孤屋」の引用はすべて同書によるものとする。

(1)

最初にブレット・ハート（Bret Harte, 1836-1902）の略歴と作風を簡単にまとめておく。⁽⁹⁾ ニューヨーク州生まれ、十八歳の時にカリフォルニアに移住し様々な職業を経た後、ジャーナリズムの世界に入る。一八六八年に雑誌『オー

ヴァーランド・マンズリー』創刊とともに初代編集長となり、同誌に発表した「ロアリング・キャンプのラック」が絶大な人気を得て一躍有名作家となる。続いて「ポーカー・フラットの宿無し」「テネシーの相棒」といった代表的な短編を次々と発表し、一八七〇年に短編集『ロアリング・キャンプのラック、その他』が刊行され、“Miglets”は本書に収録された短編の一つである。一八七一年ボストンへ移住、引き続き西部を舞台とした作品を書き続けるもマンネリズムに陥り、以後は見るべき作品もなく、一八七八年領事として渡欧したのち、ロンドンで死去した。

日本では、鷗外の翻訳による短編『洪水』（『しがらみ草紙』（明治22・10・25、11・25、明治23・3・25）がのち『水沫集』（明治25・7）にも収録されており、ハートの存在が鏡花の知見に入っていたことは確かである。管見ではこの他に田山花袋『東京の三十年』（大正6・6 博文館）に「アメリカの作者では、カリホルニアの詩人ブレット・ハートの鉱山を詩材にした短篇など（丸善の二階）」が外国文学を好む青年によく読まれたという記述を見るのみだが、少なくとも明治二十〜三十年代には一部の文学愛好者の間ではそれなりに知られた作家であったらしい。

アメリカ南北戦争後の地方色文学の流行期、ゴールド・ラッシュに沸く西部の鉱山町を舞台に、社会の下層の人々の人情や風俗を地方色豊かに描き出したことで作家としての成功を収めたハートは、その作風が大仰で感傷的な点においてディケンズとの類似を指摘されることもある。「ロアリング・キャンプのラック」は、キャンプで客を取る売春婦に赤ん坊が生まれ、周囲のならず者の労働者たちが赤ん坊を「ラック」と名づけて皆で可愛がり、ある年の洪水の折にラックを助けようとして共に死んでしまうといった物語だが、このようにハートの作品は下層社会の男女が献身的な愛情をもって自己を犠牲にするといったパターンのもが多い。故にそのメロドラマ的作風に対する批判も当然噴出し、地方色文学の代表的な作家と目されながらも、真のリアリズム小説の域には達せずというのが大方のハート評価の一致するところである。

魯庵訳の短編「孤屋」もこのパターンの作品であり、魯庵が本作の翻訳に至った経緯は定かではないが、『孤屋』の作者ブレット、ハートは近來有名なる大家なり殊に此『孤屋』は其名譽ある短編中最も傑出なるものなり読者軽々しく読過する勿れ』（『鳥留好語』凡例）と、魯庵自身が随分肩入れした作品であることが分かる。なお同書収録の短編は他に、アンデルセンの「極楽郷」「雪の女王」、ポーの「黒猫」、ヂイツケンズの「黒頭巾」、エツヂウオルスの「明日」の五編だが、「黒猫」は言うまでもなく鏡花作「黒猫」（『北国新聞』明治28・6・22〜7・23）の成立に影響を与えたと目されるものである。村松定孝氏は、鏡花は『鳥留好語』刊行時期の明治二十六年九月から二十七年にかけて、脚気療養や父の逝去に伴い帰郷中であつたため、同書を読んだという「確証は得られない」、「読んだにしてもその時期はおそらく二十八年六月」頃と推測されるが、後述するように、「孤屋」と「高野聖」の類似、またヂイケンズ「黒頭巾」の「大和心」への撮取の可能性などから、鏡花は「大和心」執筆時期とされる明治二十七年五月頃までに何らかの形で同書を読んでいたと考える。

(11)

「孤屋」と「高野聖」を比較するにあたり、始めに「孤屋」の梗概を記す。なお、本作の語り手は馬車の乗客の一人だが、固有名詞は与えられておらず、「我々」「我が一行」「我」とされる（原文は“*we*”もしくは“*we*”）。

大雨で川の水高が増して橋が落ち、行く手を阻まれる馬車の一行八人（裁判官ら男性六人、婦人二人）はどこからか聞えてきた「ミツグルスを頼め」との声を頼りにその家に避難するが、呼べどもミツグルスは出てこない。馭者のユーバ、ビルが門を壊し室内に侵入すると、肘掛け椅子に一人の男が座っている。その肩を揺ると、男は衣服の山のようになってその場に崩れ落ちる。この男は軟

骨漢（ほねなし）であった。驚く一行の前に突然ミツグルスを名乗る女性が登場し、骨なしの男ジムを一行に紹介し宿泊を快諾する。一行の食事中、外壁に体をぶつけ引つ掻く音がして、灰色の犬が飛び込んでくる。犬の名はジョアキン、他には「ミツグルスを頼め」と一行に呼びかけた鵲かづさねのポリイがこの家に同居している。婦人たちが就寝した後、男たちがミツグルスとジムの関係をあれこれ臆測する場へ当のミツグルスが現われ、自分の身を病人に献じた経緯を語り男たちはその献身ぶりに感じ入る。翌朝出発する一行を見送るミツグルス。目的地に着いた一行はミツグルスの為に乾杯をする。

一読して明らかなように、「孤屋」には怪異・幻想的な要素は皆無であるが、プロット自体は「高野聖」のそれに酷似しており、「ミツグルス」は孤家の女に、「ジム」は「白痴」に、その役割を振り替えることができる。更に梗概を補いつつプロットに添って抜き出した共通項は次のような点に集約される。

- ①旅人は大水に行く手を阻まれ進路変更を余儀なくされること。
- ②一夜の宿を求め辿り着いたのが孤家であること。
- ③孤家で最初に骨なしの男と遭遇すること。
- ④孤家の女主人が美しいこと。
- ⑤女主人は動物とも同居をしていること。
- ⑥女主人は骨なしの男性の面倒を見ていること。
- ⑦女主人に同情し惹かれる男性が存在すること。

右の①～⑦のうち、まず①について。「孤屋」の「我が一行は、前後とも水嵩高く暫時なりとも車を駐むべき好地は唯ミツグルスの家なるべしと思ふのみ」という描写における水の役割は、「高野聖」の「どうくくと瀬になつて」本道を流れる水のそれに当たる。この出水は「向うの那の藪まで」で終わっているが、宗朝は水を避けて旧道を行った（売薬）を追うので、結果的に氾濫する水が孤家への道を作ることになるわけである。②については、表題の「孤屋」及び「此処十里の内には人の子一人見えず。いかに希有ならずや、人の有りや無しや」という状況が、「高野聖」の「深山の孤家」に当てはまるものとする。また⑤について、「ミツグルス」は「ジョアキン」なる犬や「ポリイ」なる鵲と

同居しており、犬は「渠は恰も人の如く妾と共に徜徉さまよへり」、鵲は「其饒舌を弄して妾が妒辺を賑はせば妾、此孤屋にあるも毫も寂寞さびを感じず」と人間同様に描かれていることから、これらは単なる動物以上の印象を与えるものであると言え、やはり「高野聖」の種々の動物の描写に重なるものと考えらる。

次項では残る③、④、⑥、⑦の点に関わる人物造型について、「孤屋」（以下孤と略記）と「高野聖」（以下高と略記）の本文を比較する。引用に当たりルビは適宜省略、旧字体は適宜新字体に改め、改行箇所は／で示した。類似箇所を示す傍線は筆者が付したものである。なお、文中には今日の人権意識に照らして不適切な記述もあるが、作品の時代背景と文学性に鑑み原文通りとした。

1. 骨なしの亭主へジムとへ白痴

(孤) 煖爐の傍なる脇掛椅子には何者か坐を占めてありき。我が一行はドヤ／＼と押入りて此体を見、ユーバ、ビルは忽ち此子然たる椅子の主人に向ひ、／『Hello! 御身か、ミツグルスとは?』／渠は黙然として語らず、寂然として動かさず。(略) 渠は頗る老年染みて、满面皺を以て埋められ、眼光ただならず(略) 凄味を帯び、ギロリ其燈光よりビルの顔を見廻し、再び旧の煖爐火を凝視め、傍ら人なきが如く更に顧盼みまもせざりき。(略)

『ミツグルス! 御身の耳は聾ろうひたるや? よもや御身啞おんにはあらじ』と此無感覺漢むかんかくかんの肩を揺ぶりぬ。／然るに我々が太く驚きしは、ビルが其手を放すや否、此尊たむべき奇怪の男はグタ／＼になり、其形半ば陥落して唯纏ただへる衣服のみとなりぬ。

(高) 「御免なさいまし」といつたがものもいはない、首筋をぐつたりと、耳を肩で塞ぐほど顔を横にしたまゝ小兒らしい、意味のない、

然もぼつちりした目で、ぢろくくと、門に立つたものを瞻める（略）足は忘れたか投出した、腰がなくなれば暖簾を立てたやうに畳まれさうな、年紀が其で居て二十三三、口をあんぐりやつた上唇で巻込めやう、鼻の低き、出額。（第十）

孤屋に到着した彼らは室内の人物（ジム）に訪いを告げるが、彼は「軟骨漢」（作中「無骨漢」の表記もある）であり、体が崩れて「纏へる衣服のみ」となったかに見え一行を驚かせる。（白痴）の「腰がなくなれば暖簾を立てたやうに畳まれさう」な姿もやはり骨なしの特徴を示しており、⁽¹⁶⁾両作とも特異な身体的特徴を持つ人物を、それ自体では形を支えることができない「衣服」「暖簾」といった布に喩えている。また客人が、斯様な重病人を一人で放置する筈はあるまいと考える左の描写にも、「孤屋」からの明らかな影響が看取される。

（孤）裁判官は突と進みて、此不思議なる軟骨漢^{ほねなし}を起して漸く原形^{もと}に復し、ピルは燈光を持ちしまゝ屋外を見廻るべしと命ぜられしは、斯る甲斐なき病人を独り置く事あるまじければ、必ず近くに看護人あるべしと思へばなり。

（高）私は一足退つたが、いかに深山だといつても是を一人で置くといふ法はあるまい、と足を爪立て、少し声高に、（何方ぞ、御免なさい）といった。（第十）

更に（ジム）と（白痴）が身体の自由を失い、女と暮らすようになる経緯について。

(孤)『妾、此ジムと此山家に来るまでは『ポルカ、サルーン』の主人にて、^お開は僅かに六年前なり、(略)ジムは妾に馴染めて山ほどの黄金を妾の為に捨てたりき。或る日一六年前の冬なりき—ジムは妾が奥座敷に來り恰も御身等が今見給ふ如く椅子に坐して其まゝ動かずなりぬ。ジムは慥かに喪心せしなれば、如何にせまじと思ひ煩へど詮なし。医師は來りて、全く浮世の浪に漂はされて失神せしなりと云ひぬ—渠は元來勇氣猛々しく騒狂せる男なれば—且つ此病終に全快する事協はず、恐らく余命長からじと診斷して、人はフリスコの病院に送るべし、渠れ最早誰人の為めにもならじ生涯赤兒と異なるなければと賢らだちて妾に勧めぬ。されど妾は「あらず」と答へり(略)妾は終に業を売り、旅人の街道より離れし此地を購ふて、妾の嬰兒と^{をまじ}共に移り來りぬ』

(高)「二体は医者殿、手のつけやうがなくつて、身の衰をいひ立てに一日延ばしにしたのぢやが(略)／何処を切違へたか、それから流れ出した血が留まらず、見る／＼内に色が變つて、危くなつた。医者も蒼くなつて騒いだが、神の扶けか漸う生命は取留まり、三日ばかりで血も留つたが、到頭腰が抜けた、固より不具。」(第二十六)

(高)「嬢様は歸るに家なく世に唯一人となつて小兒と一所に山に留まつたのは御坊が見らるゝ通 又那の白痴につきそつて行届いた世話も見らるゝ通、洪水の時から十三年、いまになるまで一日もかはりはない。」(第二十六)

両作とも傍線部にあるように、医者に見放され身体の自由を失つた病人と共に現在の孤家に住み移りをする。(ミツグルス)は、曾ての自分の生業は『ポルカ、サルーン』の主人であり、「ジムは妾に馴染めて山ほどの黄金を妾の為に捨てた」男性だと述べる。「ポルカ、サルーン」とは酒場もしくは娼館の類であり、(ジム)は足繁く通う客の一人であつたのだらう。(孤家の婦人)には洪水で歸る家を失つたという事情もあるが、前者は大金を使わせたこと、後

者は父医者による手術の失敗といった負い目が、病人を引き取るべき理由を女性に与えたと云える。無論後者は「親仁」の語りもたらず間接的な情報だが、「孤屋」における「可憐なる女主人と其不可思議なる同居人」の描写が、「高野聖」における「婦人」と「白痴」の組み合わせの原型であることは間違いないだろう。

周知のように、前出「蝙蝠物語」には美女雪野と「俗に骨なしとか謂伝ふる、奇怪なる不具者」の亭主の組み合わせが登場するが、この点を含め従来「蝙蝠物語」は「高野聖」とその習作「白鬼女物語」との類似が指摘されてきた作品である。とすれば「蝙蝠物語」における「骨なし」も、その原型はやはり遡って「孤屋」の「軟骨漢」に見ることができるのである。

「ミツグルス」が「斯くの如き人の智識幾何かをしらば一驚すべし」と一行に「ジム」の特異な能力を披露する場面、即ち壁に貼られた「絵人の新聞」を「ジム」が冬の間「読み尽し」、「凡そ世界にジムの如く読むを値ひする人のあるべきや」と賞賛することは、「高野聖」では「白痴」が謡を唄うことにおいて發揮する非凡な才能に相当しよう。身体的自由こそ利かないものの、常人を凌駕する特殊な才能を有しているという点で、両作に類似が見られることも付け加えておく。

2. 孤家に住む女―「ミツグルス」と「孤家の婦人」―

前項に引き続き「ミツグルス」と「孤家の婦人」の間には様々な共通点があるが、最初に孤家の女が旅人の前に登場する場面を見てみる。

(孤) 瞬時にして戸は開き、白き歯と黒き眼を光らし、少しも憚る気色なく突と進み入り、礎と戸を閉て其まゝ背向に凭れ、『皆様待兼ね給ひつらむ、妾はミツグルスなり』／是れミツグルスなり！其輝ける涼しき眼眸と玲瓏として透徹せる声を有てる妙齡婦人は、青色の粗布を纏へど女性が曲線の美を失はず

(高) 「何方」と納戸の方でいつたのは女ぢやから、南無三宝、此の白い首には鱗が生へて、体は床を這つて尾をずる／＼と引いて出やうと、又退つた。／(おゝ、御坊様)と立頭はれたのは小造の美しい、声も清しい、ものやさしい。(第十)

女性の美貌に加えて声の美しさに共通の特徴が見られるが、それだけならば偶々女性の一般的な美質が似通っているだけにも見える。だが前出「白鬼女物語」で、廢屋の内を覗いた〈予〉が「薄青き布を以て腰の辺を蔽へるが身動きもせで画像の如き」裸体の婦人を発見すること、また主人の伝言を携えた老婆が「客人お待たせ申したり」と「唐突に声を懸け」ること、いずれも右傍線部の〈ミツグルス〉の描写に重なるものであり、「孤屋」の影響は「白鬼女物語」においても見いだすことができ、間接的ではあるが、「白鬼女物語」を介することで「孤屋」から「高野聖」への影響関係を指摘することができる。

次に〈ミツグルス〉の性格について。彼女は「我々人間の剛強なる部分に属する男子」と自認する客人たちが集う場に「今宵の仲間入り妾にも許し給はれ」と躊躇なく同座し、「男のすなる油布の雨帽を戴ける栗色の髪」、「渠女は辞色平淡にして憶めず憚らず、慥に男女の同等を悟りしが如し」、「男ならずば用ゑまじき言葉すらまゝ使ふ事ありき」といったように、その男勝りな性格が繰り返し強調されている。実際語り手は「ミツグルスの弁は優美にあらず」との感想も抱くのだが、それは寧ろ「快活に無邪気に飾り気なくむき出し」な美点へと反転するものであり、「其眼眸皓

齒を擅まゝに振舞ふて常にミツグルス特有の笑を洩す時は、素朴質実の空氣そゞろに道念を高め一座をして浄然たらしめ、なおかつ病人に対する「柔しき体」をも兼ね備えた「ミツグルス」は、男たちにとってこの上なく魅力的な女性となつてゆくのである。

一方「高野聖」には、これに対応する具体的な文言はないものの、それは「婦人」の「優しい中に強みのある、気軽に見えても何処にか落着のある、馴々しくて犯し易からぬ品の可い、如何なることにもいざとなれば驚くに足らぬといふ身に応のあるといったやうな風」(第十七)や「世話らしい打解けた風」(第十九)に置き換えることができよう。両作の女性は共に美貌・美声の持主でありながら男性に従属する存在ではなく、男性と同等の、あるいは寧ろ男性を主導する立場の存在として描かれているのである。

更に、「ミツグルス」の母性について。体の自由を失つた「ジム」は「生涯赤兒あかこと異な」らない状態となり、完全に「ミツグルス」の庇護下に置かれることとなる。彼は最早客でも愛人でもなく、「ミツグルス」にとつて「妾わらはの嬰兒をきなこ」たる存在となつたのである。折々来訪する医師も彼を「ミツグルスの嬰兒をきなこ」と呼び、医師の「ミツグルス、御身の嬰兒は正に人と成つて母御に恩を報ひんとす、さりながら此処にてはあらず」という「頗る悲しげ」な言葉は、「ジム」が人となり母に報いるのはこの世ではないこと、即ち「ジム」が余命幾許もないことの示唆とも取れるが、重要なのは二人の關係が明確に母と子の關係として描かれていることである。

「高野聖」の「婦人」と「白痴」は「女房」(亭主)とされる間柄ではあるが、「白痴」を「優しう扶け起し」、客人に挨拶ができれば「おゝ、よく為たのねえ」と褒める、「婦人」の「男に対する取廻しの優しき、隔なき、親切さ」は、母が子に向ける態度そのものであり、その姿に感じ入つた「宗朝」は「胸がキヤキヤして、はらくと落涙」する。夫としての役割よりも、「白痴」はその幼兒性によつて孤家の女の《慈母》的性格を引き立てる、「彼らの關係は寧

る母と子の關係に近い」という見方も出てくる所以である。

また〈宗朝〉が落涙する場面は、〈ジム〉に對する〈ミツグルス〉の「柔しき体」を見た男たちが、「百千の疑惑推測妄想を呶々嘯々し」た己を恥じ「皆しめりて言葉なく」なるという描写にも通じると思われる。赤の他人である病氣の男性を引き取り世話をすること、それが母子の關係を思わせること、客人が二人の様子に心打たれること、これらは元をたどれば〈ミツグルス〉と〈ジム〉の關係性を基盤とした設定なのではないだろうか。

更に、「孤屋」で語り手「余」が見た次の光景にも看過できないものがある。

(孤) 苦しき夢を見て余が攪眼せし時は殆ど払曉にて、暴風雨は既に熄みて星は輝き、松の梢より高く上りし満月は雨戸なき窓を徹して其光を投げ、無限の情を抱きて椅子に安坐せる凄然たる者を照らし、又古き物語にある如く乱せる髪をもて愛する男の足を洗ふ女の低き頭を光は漲して洗礼しぬ。此二人と旅人の間には半ば己れの腕に凭れて跪坐せるユーバ、ビルの賤しき形は正に是れ一幅の有声画に外ならず。

傍線部の「古き物語」とは『新約聖書』ヨハネ伝第十二章第三節、ベタニアのマリアが香油（甘松香の根から精製した高価なものとされる）をイエスの足に塗り、彼女の髪の毛でその足を拭ったという逸話を指し、⁽¹⁹⁾ベタニアのマリアとは一説に所謂「マгдаラのマリア」⁽²⁰⁾と同一視される女性である。キリスト教系の真愛学校（北陸英和学校）に学んだ鏡花であれば、右の宗教的意味を正しく理解していた可能性は当然考えられるが、仮にその宗教的意味を知らずとも、「一幅の有声画」⁽²¹⁾に喩えられるこの場面は「孤屋」一編の中でも抜きん出て美しく、宗教画を見るような趣があり、鏡花の心にも深く刻まれる場面であつたに違いない。「愛する男の足を洗ふ」という女の行為も、〈婦人〉が谷川の水

で〈宗朝〉の体を洗う行為を彷彿させ、両作の影響関係を考える上で捨象しがたい設定である。

〈宗朝〉をして落涙させるような〈婦人〉の母性的な一面は右引用の描写と無関係ではないように思われるが、この点も含めて〈ミツグルス〉↓〈孤家の婦人〉という女性の形象の経緯については、その間の「白鬼女物語」「蝙蝠物語」といった「高野聖」の先蹤作品も視野に入れた上で、更に詳細に検討する必要があると考える。

3. 女の崇拝者―ユーバ、ビル〉の造形―

以上、〈ジム〉と〈白痴〉、〈ミツグルス〉と〈孤家の婦人〉という主要人物に言及してきたが、本項では馭者の〈ユーバ、ビル〉に關しても問題と思われる点を挙げておく。

〈ジヨアキン〉が「恰も人の如く」付き従う犬だと知った〈ユーバ、ビル〉は〈ミツグルス〉に対し「太く畏敬の念を現せし」態度を取るが、これは「此婦人に畏敬の念が生じて善か悪か、何の道命令されるやうに心得た」という〈朝〉の描写に一致し、「孤屋」から「高野聖」への影響関係の確実な裏付けとなっている。右の文言の一致に限って言えば、〈ユーバ、ビル〉は〈宗朝〉に相当する人物だと言えるが、前項までの〈ジム〉や〈ミツグルス〉に見られた明確な特徴及び「高野聖」との類似性に比べ、〈ユーバ、ビル〉の描写には曖昧な点が存在するため、直ちに〈宗朝〉との類似に結びつけて考えることにはためらいが残る。

それはおそらく魯庵の翻訳技術に關わる問題であつて、魯庵の訳文には所々意味の通らない表現があり、『鳥留好語』に対しても刊行当時より「手習草紙」「乳臭の訳文」といった批判があつた。²²ただし、魯庵訳以外に唯一管見に入つた邦訳『プレットハート短篇集』（上野直藏・滝野光子訳註 昭和34・4 南雲堂）所収の「MIGGLES」対訳（以下「対

訳」を参照してみると、魯庵の訳文は概ね原作の文意に添ったものであることが分かり、大きな誤訳はないと見てよい。だが次に示すように、魯庵の誤訳の存在が寧ろ「高野聖」の描写を呼び込むような事例も存在するのである。

〈シヨアキン〉が駆け込む場面の魯庵訳「灰色の犬躍り込みて前足を上げ（中略）ユーバ、ビルに向て可笑しき所作をなし、愕けるさまにてシツグルスを凝視めぬ」（傍線部原文は「and looked admiringly at Miggles, with a very singular resemblance in his manner to Yuba Bill）」は「対訳」では「シツグルスを崇めるように見たが、それが又妙にユーバ・ビルの様子によく似ていた」とされている。魯庵訳では〈ユーバ、ビル〉に向かつて犬が行なつたとされる「可笑しき所作」が何を指すのか分からず、訳としては「対訳」の方を採るべきだろうが、重要なのは、魯庵の訳文から想起されるのが「高野聖」で頻りに〈宗朝〉を気に懸け、挙句〈婦人〉にひれ伏したあの馬の姿（＝〈売葉〉）であり、人間に向かつて何かを訴えかけ、飼い主の女性には従順な態度を取る動物の造形がここに存在しているという事実である。ここでは強いて〈ユーバ、ビル〉＝〈宗朝〉という図式を持ち出さずとも、ひとまず「孤屋」という作品が「高野聖」の典拠である蓋然性を指摘できればよいのだが、仮に〈ユーバ、ビル〉と〈宗朝〉を重ねてみると、次に示す翌朝の別れの場面にも両者の類似性をうかがうことが可能である。

馬車に向かつて〈ミツグルス〉がハンカチを振ると、「ユーバ、ビルは惜しき別に暇取るを恐れ馬に鞭を加へて一散に車を走ら」せる（傍線部原文は「Yuba Bill, as if fearful of further fascination, madly lashed his horses forward」）。「対訳」では「ユーバ・ビルはこの上魅惑されるのを恐れるかの様に烈しく馬を鞭打った」と訳す。魯庵は「fascination」の語義を曖昧にして「惜しき別に暇取る」と持って回った言い回しをしているが、〈ミツグルス〉に對する強い未練は感じ取ることができよう。彼女の面影を振り払うかのように馬車を駆る姿は、孤家を後にした〈宗朝〉の葛藤に反映しているように思われる。

そもそも鏡花の目に触れるのは魯庵の訳文が全てであり、一々翻訳の正誤を気に懸けながら読むわけではない。誤訳に起因すると思われる魯庵の表現の曖昧さは鏡花が何らかの形で消化すればよいのであって、その点で〈ユーバ、ビル〉の〈ミツグルス〉に対する「畏敬の念」は、鏡花によってより鮮明に詳細に、〈宗朝〉の上に描出されたと言えるだろう。

(三)

鏡花が『鳥留好語』を読んでいた証左として、ディケンズの「黒頭巾」と「大和心」の類似にも蛇足ながら簡単に触れておく。「黒頭巾」の梗概は次の通りである。

開業したばかりの医師のもとを黒装束の女性が訪れ、ある患者の診察を依頼する。女性の話は要領を得ず、患者は重篤な状態だが診察は翌日に願いたいと言う。不審に思いつつ医師が教えられた家を訪問すると、そこには今朝絞首刑に処せられた女性の息子が死体となって横たわっていた。女性はどうかしてほしいと医師に縋るが、手の施しようもない。その後精神を病んだ女性を、医師は時折訪問して慰め、金銭の援助もする。女性の死後も医師の心にはこの一件が長く記憶されることになる。

一方「大和心」は日清戦争を控えた時期の国粹主義的傾向が顕著な作品である。無礼を働いた外国人を少年が飼った犬を使って成敗し、外国人と犬は病院へ同時に運び込まれるが、医師によって治療を受けたのは犬の方であり、外国人は手遅れとなって落命する、というそのプロットは「黒頭巾」とは大きく異なるが、本作において犬の〈飛龍〉が病院に運び込まれる場面は、鏡花が『鳥留好語』所収の「黒頭巾」から摂取したものとおぼしい。以下「黒頭巾」(黒)

と略記)と「大和心」(大と略記)の共通項を簡略に記す。

①夜更け、若い医者のもとに異様な来訪者がある(黒↓「近頃開業した年若な医者」と「黒装束」の「不思議なる訪問者」、大↓「村上千吉といふ若手の利者」^{きげもの}と「月の如き美人」)。②女性は患者の素性をすぐには明かさないが、いざ患者に臨んだ医師には驚くべき事実(異様な患者)が提示される。(黒↓「今朝絞罪になつた」女性の一人息子、大↓犬の「飛龍」)③戸惑う医師に女性は診察を懇願する。(黒↓「先生、此まんに置かずにどうにか御工風をして。此現在命が段々去って行きます。先生、どうにかなすって、どうか」、大↓「どうぞ御手当を願ひたい存じます。実は他所で傷を負けてまゐつたのでございますが、重傷で呼吸も為得ません。何卒してお助け遊ばして下さいませ」)

特異な状況や環境における特異な人物という設定、単純化された性格描写はディケンズ作品の特徴であり、前出のブレット・ハートも影響を受けたとされるものだが、それはそのまま「大和心」にも看取される特徴である。また「黒頭巾」の如き「ディケンズ得意の犯罪をテーマとした暗い物語」²³は、鏡花の観念小説の特徴にも通じるものだが、その点についてここではこれ以上触れず、まずは右の類似を指摘するのみとする。なお鏡花が「大和心」や「外科室」(『文藝倶楽部』明治28・6)に用いた語「外科室」の用例は、この「黒頭巾」から得たものであろうことも最後に付言しておく。²⁵

まとめ

以上、鏡花が『鳥留好語』を自作の典拠とし、中でも重要なものとしてブレット・ハート作「孤屋」と「高野聖」の影響関係を論じてきたが、「孤家の婦人」と「白痴」の形象が「ミツグルス」と「ジム」の関係を基とするものであることは間違いない。彼女は理想的な女性の慈愛・献身を体現する存在でありつつ、同時に男勝りの「飾り気なく

むき出し」な性格を持つことも先に述べた。この性格が『金驢譚』などの先行文芸とも結びつき、「高野聖」の「婦人」が有する「魔性」へ結実したと見ることもまた可能なのではないだろうか。無論〈ミツグルス〉の中に魔的な側面は元来看取しようもないのだが、男勝りという特異な性格もが単に彼女の魅力の一つとして均質化されてしまうのは、「孤屋」の語り手が〈我〉に終始一貫することとおそらく無縁ではない。この点において「孤屋」という作品は「高野聖」が内包する複雑な語りの問題を考察する上でも、重要な作品だと考える。

本稿は、ひとまず「孤屋」が「高野聖」の一典拠であることを確定する点に重きを置いて論じるものであるが、「孤屋」が「高野聖」のみならず、『金驢譚』―「白鬼女物語」―「蝙蝠物語」―「高野聖」という一連の系譜にどう関わっているのか、その語りや人物造形、モチーフなどの様々な側面から更なる検討が必要であることは言うまでもない。今後の課題とし、別稿を期したい。

注

- (1) 以下、本文の引用は『新編泉鏡花集』第八巻（平成16・1 岩波書店）による。
- (2) 手塚昌行『高野聖』成立考（『解釈』昭和34・12、35・1、8）、東雅夫「泉鏡花とアラビアン・ナイト」（『金羊毛』昭56・3）、藤澤秀幸『高野聖』―孤家の女をめぐる―（『国文学解釈と鑑賞』平成元・11）、須田千里「鏡花における「魔」的美女の形成と展開―『高野聖』を中心に―」（『国語国文』平成2・11）、野口哲也「白鬼女物語」から「高野聖」へ―森田思軒訳「金驢譚」の受容と方法―（『日本近代文学』第73集 平成17・10）など。
- (3) 「高野聖」の水中夢（『国文学ノート』昭和50年3月）
- (4) たとえば、高山宏氏の「この魔女は男を滅ぼす吸血鬼だと同時に、「優しさ、隔なさ、深切さ」を云われる「若い母様」である」（『合

- 理を衝つ—泉鏡花『高野聖』—『文学』昭61・8」という指摘や、高田衛氏の「聖（魔）性と俗性の両義にわたって疊感的な、魔女」（夢と山姫幻想の系譜—鏡花への私注—）『文学』昭和58年6月」という指摘など。
- (5) 前者は東郷氏前掲（注3）論文、後者は野口武彦氏「高野聖」（鑑賞日本現代文学第三卷 泉鏡花）昭和57・2 角川書店に指摘がある。
- (6) 高田氏前掲（注4）論文。
- (7) 笠原伸夫『高野聖』の神話的構想力』（『文学』昭和62年3月）
- (8) 野村喬氏はこの書名を「柳田泉の示教によると出典は偈語にあり、飛び立つ鳥が心に沁みるような美声を残して行ったの意であって、つまりは好短編であることを匂わせたもの」（『内田魯庵伝』平成6・5リポート）とされるが、魯庵自身は「鳥留好語へ真個に取留めぬ言葉なり」と述べている（『適堂生に謝し併せて我が翻訳に於ける経験及び一家言を述ぶ』（『読売新聞』明治26・10・30）。
- (9) 細入藤太郎『アメリカ文学史』（昭和35・4 培風館）、大橋健三郎・斎藤光・大橋吉之輔編『総説アメリカ文学史』（昭和50・4 研究社出版）、『アメリカ文学作家作品事典』（平成3・12 本の友社）、亀井俊介『アメリカ文学史講義2—自然と文明の争い—金めつき時代から一九二〇年代まで』（平成10・10 南雲堂）などを参照した。
- (10) 鏡花「みなわ集のことなど」（『新小説』大正11・8）には秘蔵の『水沫集』を質草に借金をした経験が述べられている。
- (11) 例えば弦巻克二「鏡花の転換—『黒猫』なまもと桜を中心に」（『光華女子大学研究紀要（日本文学科篇）』昭和62・12）など。
- (12) 『EDGAR ALLAN POE の BLACK CAT と泉鏡花「黒猫」の比較文学的考察』（『学苑』昭和43・1、のち『泉鏡花研究』収録 昭和49・8 冬樹社）
- (13) 『幼年雑誌』（明治27・8・15、9・15、10・1、10・15、11・1、11・15、12・1）
- (14) 弦巻克二「鐘声夜半録」小考』（『光華女子大学同短大研究紀要』昭和49・12）
- (15) 「高野聖」では、孤家から旅籠のある場所までは八里余りの距離があるとされている。

(16) 「高野聖」(第十七)には「白痴」を「海月も日にあたらねば解けぬと見える」と海月に喩える描写があるが、これは民話の「くらげ骨なし」猿の生き肝を獲るのに失敗して龍王に体の骨を抜かれてしまう海月の話」が下敷きとなったものであり、やはり「白痴」＝「骨なし」を連想させる。

(17) 坂井健氏「泉鏡花「蝙蝠物語」とその問題点」新資料「新文壇」第六号から——『日本近代文学』昭和63・10)、須田氏前掲(注2) 論文などに指摘がある。

(18) 藤澤氏前掲(注2) 論文。

(19) 参考までに明治期刊行の『新約聖書』の該当部分を次に引いておく。香油の匂いが室内に満ちること、「高野聖」(第十五)の「不思議な、結構な薫のする暖い花の中へ、柔かに包まれて」という描写にも通じるかと思われるが如何なものか。

「逾越」の祝の六日前イエスベタニヤに至る此処へ即ち死に死に魅しラザロの在をまもる所なり 是に於て或人々この処にてイエスにひまほひを設くマルタ給仕を為りラザロもイエスと偕ともに坐せる者のうちの一人なり マリアハ真正まことのナルダなる価たかき香にほひあがら膏一斤を携もちまきり来てイエスの足に塗また己が頭かしら髪にて其足を拭へり膏のほひ徧く室内に満り」『新約聖書』(明治18 米国聖書会社)

(20) マグダラのマリアに付される「聖女にして娼婦」といった一般的イメージは「孤家の婦人」の両義的な性格にも重なるが、鏡花の聖書の知識がどれほどのものであったか確証がないため、ここでは指摘のみとし更に検討を重ねたい。

(21) 「有声画」が具体的にどのようなものを指すのかは不明。「詩は有声の絵、絵は無声の詩」との謂いもあるが、ここでは宗教画の意味合いに近いものと解釈しておく。

これに関して気になるのは、(ミツグルス)〈ジム〉(ユーバ、ビル)が描き出す「一幅の有声画」の構図が、明治四十一年二月左久良書房刊行の『高野聖』に鎌木清方が描いた口絵を彷彿させることである。特に「己れの脇に凭れて跪坐せるユーバ、ビルの賤しき形」は口絵の「親仁」に類似しており、鏡花が何らかの形で「孤屋」の存在を清方に伝授した可能性もなしとはしない。更に調査を進めたい。

(22) 前出注8、魯庵自身の述懐。適堂生『鳥留好語』を讀む」『読売新聞』明治26・10・9、16、23)における「黒猫」「黒頭巾」

の誤訳や見落としに対する批判に魯庵が応じたもの（同・11・6、13にも掲載）。

(23) 『アメリカ文学作家作品事典』（注9前掲書）中、「ブレット・ハート」の項目を参照した。

(24) 松村昌家「明治期翻訳文学と私」、『ディケンズ集』（明治期翻訳文学全集《新聞雑誌編》6 平成8・6 大空社）

(25) 作中に「客人の極めて不思議な形体に驚かされたらしい様子で外科室に導く硝子戸に指さした」「取次人は開扉の硝子を蔽ふ緑色の帷帳カーテンを張つて外科室へ退き」という表現がある。

（本学非常勤講師）